

群馬県大泉町における日系南米人のライフヒストリーと居住環境

加藤ゆかり

群馬県立伊勢崎商業高等学校

本研究では、群馬県大泉町に居住または大泉町で学齢期を過ごした経歴のある日系南米人のライフヒストリーを明らかにすることを目的とした。本研究では、日本の外国人労働者の先駆的な存在である、日系南米人の第一世代および第二世代による詳細なライフヒストリーを通して、既往研究では明らかにされていなかったホスト社会の取り組みや居住環境が、日本での居住地選択やキャリア選択を行う際に大きく影響していたという、新たな視点を提供した。また、年代や通学学校種などにより、生活実態には差異が生じていたことも明らかとなった。本研究で明らかとなった諸点は、複数世代の外国人居住者と共生するホスト社会の在り方を考える上で、有効な資料となるといえる。

キーワード：日系南米人、生活実態、居住環境、ライフヒストリー、群馬県大泉町

I はじめに

近年、日本が人口減少社会へと転じたことに伴い、産業界では労働力不足が大きな課題となっている。外国人労働者の受け入れはその打開策の一つとされ、一部の企業や個人経営者には、労働力の維持において既に必要不可欠な存在となっている。こうした背景のもと、外国人居住者数は年々増加し、2018年末時点で273万人を超えた（法務省、2019）。また、2019年4月から新たに在留資格、特定技能が創設された¹⁾ことで、今後も増加の一途を辿ることが予想される。一方で、2018年末時点での在留資格を概観すると、永住権保持者が77万人と最も多いことから、外国人居住者²⁾を一時的な滞在者ではなく地域住民として捉え、共生することを考える必要があるといえる。

1990年に日本では、労働者不足を補う措置として、出入国管理及び難民認定法（以下、入管法）が改正された。今回調査対象とした日系南米人は、その数の多さからニューカマー³⁾の中心的な位置を占めている。かれらの多くは一時的なデカセギ⁴⁾労働を目的に来日し、第二次産業に従事していた。そのため、日本国内で第二次産業が集

積している愛知県をはじめとした東海地方や、関東地方北部に集住した。

日系南米人に関する研究は、デカセギ目的の第一世代を対象とし、数多く蓄積されてきた。例えば、大谷（1998）や島田（2000）では、第一世代は企業の寮などに集住しているため、日常生活は、第一世代同士の同胞ネットワークを生活基盤としていたことが明らかとなった。そのため、外国人居住者と日本人社会、つまりホスト社会の接点が少ないために、軋轢の発生が指摘されている（梶田ほか、2005）。また、定住化の進行に伴い、第一世代の子弟にあたる第二世代が増加した。これを背景に、志水・清水（2001）や清水（2006）などをはじめ、第二世代の学校適応をテーマとした研究が教育社会学を中心に行われている。その中で角替（2015）では、第二世代の日本社会への適応には、日本語の獲得と学校経験が大きく影響している可能性を示した。このように、言語能力と学齢期の過ごし方が日本社会への適応へ影響を与える可能性が示唆されているものの、居住地域であるホスト社会との関係については言及されていない。また、拝野（2010）ではブラジル人学校に就学する第二世代を対象に、キャリア選択の特